

10・ゆい、いつ、あなただけ

09から数時間後。一月二十五日（土）十四時ごろ。

ずずらん市汐見台……から、だいふ離れた田舎町へ向かう、海沿いの道。

主人公、おじいちゃんから借りた例の車で『そこ』へ向かっている。
電車やバスで行くには、ちよつと手間な場所に唯為理がいるからだ。

SE1 車内の環境音

【最初から流す】

【0―10秒ほどまで流してフェードアウトする】

【フェードアウト後、場面転換】

主人公、赤信号になったのとともに、今時カセットテープしか聞けないカーステレオ……ではなく、スマホの音量を上げて、サブスクアプリからの音楽に耳を傾ける。

同時にロック画面の日付が目に入って、今日が土曜だという事をようやく思い出す。

そっか。ド田舎の割に妙に道混んでんなと思ったら、土曜か。
曜日感覚がなくなってたわけじゃなかったけど、つまりわたしは、今それ位、慌てて
るって事ですね。

するとその時曲が切り替わり、主人公の、特にお気に入り曲になる。
その歌詞が、ところどころ今の状況に似ている気がして口ずさむが、ちっとも思うよう
に歌えない。

……昔から歌は苦手なのだ。

音痴すぎて、カラオケや合唱でしょっちゅう笑われた気がする。某さんとかに。

〈主人公〉

「へっただなあ……」

主人公、ひとりごとを言った途端、急に泣き出しそうになる。
歌だけではない。自分には、下手な事が多すぎる。

人生の大切なところで選択ミスをしまくって、色んなものを失って、今日にいたる覚え
がありすぎる。

今だって、正しい行動ができているのかわからない。

ていうか、確実に正しくない、気がする。

わたしは今、唯為理ちゃんの意味を無視して、唯為理ちゃんに会いに行こうとしている。結局、衛藤さんと同じになってしまったのだ。

“やっぱり、ちゃんと話を聞いてもらわなくちゃって。私の気持ち、わかってもらわなくちゃって”

うん。あの人こんな事言ってたもん。

……やべー。キヤラ被ってきてないか、これ。

かぶってるのは、女の子の好みだけで十分なんですけど。

“自分でも、夢中になり過ぎちゃってるなって、思います。

だって以前の私だったら、きつと諦めちゃってました。

『喧嘩したらもうダメかな』『価値観が違うなら一緒にはいられないのかな』って。自分を納得させようとしてたんじゃないかな。

でも、今回は、そうしたくないなって”

やばいやばいやばい。

“もう一度彼女に、何が正しいのかわかってもらう機会が欲しいんです”

……でもわたしは、自分が正しいなんて全然思えない。

唯為理ちゃんの選択こそが正しいと、その味方をすると言いたかったのに、結局否定するような事をしているから。

主人公、運転しながら、今度は助手席に置いた自分の鞆の事を思う。

中には、最後までコンプリート出来なかった、四つの変身ヒロイングッズが入っている。『この期に及んでそれを持ってきたのか』と言われそうだが、というか、自分でもつくづくそう思うが……。それでもこれは、勇気を出すためのお守りだ。

今日唯為理に、自分の気持ちを打ち明ける時、引かれても大丈夫なように。

今日うまく行かなくても、完全に唯為理に嫌われてしまっても、頑張れるように……。

主人公はこれを持ってきたのだ。

ねえ、唯為理ちゃん。

あなたはさっき、わたしをヒーローみたいな人だと言ってくれたけど。

確固たる意志を持ってわたしの前を去ったあなたを、こうして未練がましく追いかけるわたしは、確実にろくな女じゃありません。

個人的な好き嫌いで、衛藤さんを唯為理ちゃんから遠ざけたわたしは、『明るくて、優しく、誰にでも親切』な理想のヒロインにはなれなかったし。

憧れのお姉さんに近づく条件は、別に『車を運転できる』事じゃなかった。

好きな漫画の主人公みたいに冷静な判断をして、唯為理ちゃんを見送る事もできなかったし……。

ここまで『なりたい自分』からは程遠い事をして、わたしは今、一体、何をなさそうとしているのでしょうか。

“えっ？　ほんとにこれで終わり？”

絶対おかしいって。

ヒロインを幸せにする事が、この手の作品の主人公の役目なんじゃないのかよ！”

頭の中に、今度はかつて自分が思った事がよみがえる。

あの時、主人公はのんきにテレビドラマに文句を言っていた。

ヒロインに別れを告げられて、追わずに別々に生きていく事を選択した主人公を……生意気にも罵っていた。

でも今は、当時と同じようには思えない。

だって、人は皆、自由に生きる権利がある。

『他人を幸せにする義務』なんてものは存在しないのだ。

だから、どんなに好きでも、好かれてても。

自分のために別れを選ぶ事があるって、それは尊重されてしかるべきものだって、もうわたし、痛いほど思い知ったじゃん。

でもね。思い知ってるのに、わたしは行く。
わかってるのに、間違った選択をしに行く。
そういうのって……。

〈主人公〉

「……どうかしてるぜ」

主人公、苦々しくそうつぶやいて、泣きそうになりながらも運転を続ける。

そのまま、目的地が近づいてくる。

一度フェードアウトする。

一方その頃。

唯為理、今日の宿泊先である、とあるホテルにいる。

だが、なぜか部屋には入らず、ロビーのラウンジの一席に、ポツンと座っている。
土曜日だが、周囲にあまり人はいない。ほぼ貸切である。

このホテルは、十五年ほど前、小湊家と奥平家で一緒に来たところだ。

この地域に明るくない唯為理にとつて、ここは数少ない、この地域の思い出の場所だ。同時に『パツと思いつく、唯一の宿泊場所』だったのである。

あの時は楽しかった。

家族みんなでワイワイ温泉に入ったり、佐智と海に行ったり。

おじいちゃんが向こうのゲームコーナーで、無限に遊べるくらいのお小遣いをくれて、全部のゲームを遊んだりした。

唯為理、おじいちゃんの事を思い出すと泣きそうになってきたので、思い出を振り返るのはやめて、鞆に入れたノートを取り出す。

今日はほとんど荷物を持ってきていないが、これはどうしても持ち出さねばならなかった。

見られるとまずいものばかりが、ここに描かれているからだ。

ところでなぜ唯為理がラウンジに居るかというと、早く着きすぎたのだ。

早朝に出発した割には、ずいぶん近くに泊まる事にしたからである。

結果、チェツクインの時間にはあまりにも早く、かと言ってコミュニケーション能力の

低い唯為理は『早く部屋に入れていただく事はできますか』と相談する勇気がない。

結果、他の場所で時間をつぶしたり食事をしたりするのも限界を迎え、すでにもうここの何時間も、ポツンとしているのである。

実に段取りが悪い。

なぜいつも自分はこうなのか……。

唯為理、自分自身に落胆しつつも、今度はペンを取り出す。

もういいや、絵描こう。

誰かに見られたら嫌だなと思って自重していたけれど、これだけすいているなら、わざわざ誰も近くまでは来なさそうだ。

『この期に及んでやる事がそれか』と言われそうだが、仕方ない。

自分の一番好きな事、やりたい事はこれなのだ。

ノートの中には、自分の一番好きな人の事がひたすらかかっている。

今日はその人とどんな風に過ごしたか、その結果、どんな事がわかったか。

そんな日記やその人に関する調査結果、そしてその人の絵がかかっているのだ。

これを絶対に誰にも見られたくないのなら、途中どこかで捨ててくればよかったのだが、それはできなかった。

自分にとって今一番大切な情報が詰まっているのはこれだから、どうしても持っていたかったのだ。

唯為理、ノートを後ろから開いて、後ろから九ページ目辺りに絵を描き始める。八ページ目以前に描いてあるのも、すべてその人の絵だ。

我ながら気持ち悪くなってくるが、この秘密は墓までもっていくつもりなので、許してほしい。

唯為理は今日まで、その人の事を色んな絵柄で描いてみた。

その人はいたいそうな漫画好きだ。だから、たとえばその人の好きな作家に似せた絵柄で似顔絵を描いたら、きっと喜んでくれるのではないかと思ったのだ。

だから、色々チャレンジした。

その人世代に人気の変身ヒロインアニメ風も、最近その人が一気読みしたという漫画アブリの作品風も、主人公が何度も読み返しているという少年漫画風も、こっさり、たくさ

ん練習したのだ。

だが、結局披露する機会はなかった。

満足の行くクオリティを目指していたら、見せるタイミングを逸したのだ。自分にはそういうところがある。やはり段取りが悪いのだ。

それでも唯為理は、毎日のように模写の練習をしながら、繰り返す同じ妄想をしていた。それは……まず、唯為理がイラストを描いて、その人に見せる。するとその人は

“すごい！ 唯為理ちゃんは本当に絵が上手だね。

嬉しい！ こんなに素敵に描いてもらえるなんて思わなかった”

なんて、ひとしきりほめてくれてから——……。

“でもわたしは……唯為理ちゃんの普段の絵柄が一番好きかな♥”

って笑ってくれるのだ。

唯為理はもう、この妄想を百回以上はした。……現実になる事はなかったが。

なので唯為理、もはや見せる事は想定しなくていいのだ……。
と、好きなようにその人を描き続ける。

SE2 ラウンジの環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

SE3 唯為理がノートに絵を描く音

【最初から最後まで流す】

唯為理が特に好きなその人の姿は、初めて会った時の格好だ。
本人には、言っても絶対に信じてもらえないだろうが……。

唯為理は、あの姿に一目ぼれしたのだ。

それは全身白の、宇宙服みたいで、雪だるまみたいで、それから、白いお菓子みたいな、
人気のキャラクターにも似ている。

確かに、変な格好だったかもしれない。

あとから本人から聞いたが、コートの下に着ていたのは部屋着だったらしいし、お化粧もしてなくて、髪の毛なんて、起きたままだったという。

でも、唯為理には、そんな事は関係なかった。

ただただあの時の彼女は素敵だった。

迷いなく自分に近づいてきて、優しく声をかけてくれて、手を引いてくれた。これこそがヒーローだと思った。

もしこんな人と一緒に過ごせたら、自分は絶対に幸せになれると思った。事実、なった。……もうそれは過去の話だが。

唯為理、黙々と絵を描き続ける。

そう。確かこんな感じだった。

どうしてこんなに全身白で揃えられたんだろうってくらい白くて、暑そうで。それから——……。

【最初から最後まで流す】

【遠くから、だんだん近づいてくる】

唯為理、描くうちにどんどん熱が入り、集中するほどに、周りの音も聞こえなくなってくる。

そして、高速で一枚仕上げかけた頃……。

〈主人公〉

「あの、まさかとは思うんだけど、これわたし？」

『その人』の声が聞こえた。

【予想外の事に驚くが、それでも声が大きくない】
ひゃっ!？」

対する唯為理、ここまで寄られて、ようやく人が近くまで来ていた事に気づく。絵に集中していたせいで、足音が聞こえなかったのだ。唯為理、慌てて手でノートを隠す。

SE5 唯為理がノートを隠す音

【最初から最後まで流す】

【必死に否定する】

違います。

【必死にごまかそうとする】

これはあの。

【嘘を思いつく。自分では『これでごまかせる!』と思っている】

お酒のCMの女優さんを描いてたんです」

唯為理、必死にごまかす。

そうだ。『その人』は、以前佐智に『お酒のCMに出ている女優さんに似ている』と言われていた。

唯為理としては、女優さんよりも、その人の方が、より自分好みの顔だと思った。だが、彼女の存在は非常にありがたい。

彼女の絵を描いていたといえば、この場を切り抜けられるだろう！

……だが、『その人』は『うーん……』と眉間にしわを寄せて首を傾げた後、ゆっくりとさらにこちらへ近づいて、ノートをもう一度見せるように促し、そしてこう言った。

〈主人公〉

「わたしも最初そう思ったんだけどさあ」

「【主人公が納得していないようなので驚く】
えっ」

〈主人公〉

「これとか、服もわたしと同じだし」

「【『確かにそうだ』と気づく】

あ」

〈主人公〉

「……あの人、さすがに雪だるまみたいな格好はしてないと思うんだよねえ……」

「もはや言い逃れ出来ない」と理解する」

ああっ……!!？」

〈主人公〉

「なんでわたしの黒歴史なんて描いてるの。そんなにおもしろデザインだった？」

ここで『その人』がおかしな事を言う。

聞き捨てならない。

唯為理、思わず反論してしまう。

「【必死に強く否定する】

黒歴史なんかじゃないです。私あなたのこの格好大好きです。

マシユマロみたいで可愛いって、初めて見た時から思っていました。

『【だから描いたんです】』と言いかける」

だから描、

【少し間をあけてから。これで、完全に主人公だと認めてしまった事に気づく】
あ」

〈主人公〉

「やっぱりわたしじゃなか」

「【ものすごく恥ずかしい】

はい……あなたを、描いてました」

〈主人公〉

「……そっか。そんなに気に入ってただけでたとは嬉しいな。

唯為理ちゃんの絵柄になると、マシユマロおぼけバージョンの私も相当かわいいねえ」

ていうかこの人、なんで普通に話しかけてくるの……？

怒って、ないの？ 私の事責めたり、叱ったりしないの？

ていうか、可愛いつて言った……。

私の絵柄が可愛いって言った……。初めてじゃないけど嬉しい……。

唯為理、あまりにも『その人』が普通に話しかけてくるので、かえって混乱する。

自分は今朝、その人との約束を破って、逃げるようにこんなところまで来た。

なのに、その人……主人公は怒っていないどころか、最初からここで待ち合わせしてい

たみたいな顔で話しかけてくる。
わけがわからない。

〈主人公〉

「ていうか唯為理ちゃん、こんな所で何やってんの。お部屋に入らないの?」

唯為理、もつともな指摘をされて小さくなる。

数時間前、あんな別れ方をしたくせに、今はこんなところで一人絵を描いていて、そこを見つかるなんて、あまりにも間抜けだ。

「【恥ずかしくなる】

あ、その。

【主人公と初めて話した時のように、しどろもどろになる】

今日はここ、泊まるつもりだったんですけど早く着きすぎて。

このラウンジなら人もいませんし。

チェックインまで、絵でも描いてようかなと。

【ここで『ハッ!』と気づいて。『このままではいけない!』と、何とか反撃しようする】

あなたこそ、何でここにいるんですか」

〈主人公〉

「あ、佐智さんに聞きました。だからわたしも今日はここに泊まるね」

「【驚いて、悲鳴のようになる。『裏切ったな!』という感じで】

さっちゃんに聞いて……!?

ひどい。さっちゃん、あなたには教えないって約束してくれたのに」

主人公、数時間ぶりの唯為理の顔を見て思う。

うーん。佐智さん、約束は守ってるんだよね……。

わたしたちは、トンチのようなやり方で情報授受して、ここにいるわけですよ。

主人公は思う。

正直なところ、もし無事に再会できたら、自分は感情を抑えられる気がしなかった。

唯為理の顔を見るなり『なぜ置いて行った』と泣きわめいたり、『わたしをなんだと思ってるの』と怒鳴りつけてしまうのではないかと、心配だったのだ。

だけど、先ほどようやくこのホテルにたどり着き『ひとまずあそこのラウンジにでも座っ

て、おばあちゃんと佐智さんに連絡してから、用意してもらった部屋にチェックインしよう……』。

と、ラウンジに近寄ったところ。

薄暗い部屋で背中を丸め、なぜか一心不乱に絵を描いている唯為理を見つけたら、怒りや悲しみは、全部吹き飛んでしまった。

それどころか、ただただ愛しさが沸いて……。

なんかもう、わたし唯為理ちゃんが楽しそうにしていられるなら何でもいいや。

と、思ってしまったのだ。

そして、一体何を描いているのか気になって、覗き見はいけないと思いつつも、つい近い近づいて。

かなり近くまで来たのに全く気付かず、描き続けている唯為理が面白くなってきた。とうとう何を描いているのか見たら、それが明らかに自分だったものだから……。あまりにも意外すぎて、つい普段のように話しかけてしまったのだ。

〈主人公〉

「まあまあ。実はね、わたし、ちゃんと唯為理ちゃんに用事があってきたんだ」

主人公、混乱する唯為理をたしなめつつ、目の前の椅子を引いて、腰かける。

SE 6 主人公が椅子を引く音

【最初から最後まで流す】

SE 7 主人公が椅子に腰かける音

【最初から最後まで流す】

二人は向かい合って座る形になり、主人公、それから身を乗り出して、話し始める。
唯為理もまた、思わず同じように身を乗り出す。

「【主人公が何をしに来たのか全く分からない】

え？

【少し間をあけてから。だが、食いついてしまう】

「ご用事が、あって来たんですか？　なんですか？」

〈主人公〉

「あのね、唯為理ちゃん。わたし、やりたい事が決まったんですよ。だから、お祝いしていただこうと思って」

「嬉しくて、思わず素で答えてしまう」

やりたい事、決まったんですか？

【気になって、食い気味になる】

なんですか？」

主人公、あまりにも唯為理が普通に食いついてくるので、面白くなってしまった。自分は今朝、もう唯為理には二度と会えないのではないのかと思った。

会えたところで、すぐに逃げ出されてしまうかもしれないと不安だったのだ。なのに、唯為理は逃げるところか、身を乗り出して話を聞こうとしている。

正直、可愛い。

頭撫でたい。手や肩や頬に触りたい。……そのまま、ぎゅっとなしたい。

〈主人公〉

「うん。自分の本当に思っている事を言う事。それがわたしのやりたい事。

唯為理ちゃん。昨日、実はわたし、自分で言っておいて、自分はしたい事ができなかったんだ。

だから、今しようと思ってる。

ごめんね。ちよつと付き合って?」

「**なんとか落ち着いて。自分はもう主人公と話す資格はないと思いつつも、応じる**」
わかりました。約束は約束ですよね。

今は他の事忘れます。私に話したい事……聞かせて下さい」

〈主人公〉

「あのね。わたし、あなたが好きです。

友達として仲良くなれて嬉しいとか、妹みたいで可愛いとか、作家さんとして尊敬してるとか。

それもあるけど、それだけじゃないです。

あなたの事を、一人の人間として好きで、お付き合いしたいと思ってます」

「**予想だになかった事を言われて、泣きそうになる**」

あ……!？」

〈主人公〉

「だから、わたしとお付き合ひしてくれませんか。

すずらん市には居づらいけど、特に行くところ決まっていって言うなら、わたしの地元おいで。

わたしの地元からなら、一時間くらいですずらんまで行けるから。

これまで通りおばあちゃんの様子もよく見に行けるよ。

唯為理ちゃんの地元ほどじゃないかもだけど、そこそおっきい街だから、住みやすいと思う。

……良くない？」

唯為理、予想だにしない主人公の『自分の本当に思っている事』に言葉をなくす。

衝動的に『はい』と言ってしまいうになる。

だが、それだけはダメだ。すぐに己を律して、主人公を拒絶する。

「【即答するが、声が震える】

ダメです。お付き合ひはできません。

もう巻き込めないって言ったじゃありませんか」

〈主人公〉

「そうなんだけどき。巻き込まれたいんですよ、わたし」

なのに、主人公はまるで動じない。

『この位の反応は想定内』とでも言うような態度だ。
唯為理、ますます混乱し、感情的になる。

「主人公の言っている事が信じられない。

初めて本気で怒るが、やはり声は大きくなならない」
どんな目に遭うかわからないんですよ。

【少し早口になる。『信じられない』という感じで】

あの人に私との関係がばれたら。あなた、何をされるかわからないんですよ？」

〈主人公〉

「……うん。正直それには相当ビビった。

自分の身が可愛いんだったら、唯為理ちゃんとはもうお別れした方がいいのかもしれないな

い。

そう思った。

ここ、すらんから車だと一時間くらいだけど、来るまで一時間くらい、サービスエリアでご飯食べながら超悩んだ。

だからこの時間になっちゃった」

ま、逆に言う和一時間しか悩まなかったんですが……。

主人公、思う。

だってさ、唯為理ちゃん。

人間生きていると『後悔しないように生きろ！』みたいに言われる事って、しょっちゅうだよな。

でも、人生、どのタイミングで後悔するかなんて、その時にならないとわかんない？ 『ベストを尽くした』『最良の選択をした』って思える時さえ、後悔する時はする。

最初はいいい選択に思えても、後から間違いだってたって気づく事もあるし……。

その逆もあるよね。

だったら、いつするかわからない『後悔』の事なんて視野に入れてられない。
わたしは『今、これでいい』と思う事をしたい。そう思っただよ。

「心からそう思って」

そうです。私といっても何もいい事ありません。

「少し間をあけてから。泣きそうになる。それでも、こう言う事で主人公を説得したい」
不幸になります」

〈主人公〉

「ていうかね。逆にもう不幸なんですよ」

「『バカな事を言うな』『自分と居る以上の不幸なんてない』と思っている」
何を言って」

〈主人公〉

「だって、唯為理ちゃんがいないと思うと、わたしほんとだめ。
何にも楽しくなくて、生きてる感じがしないの。抜け殻みたい。
ここに来るまでも、ずっと唯為理ちゃんの事ばかり考えてた」

「拒絶しようとしてはいるが、心が揺れている」

確かに今はそうかもしれないが、心は揺れていません。

でも、会えなくなったら、私の事なんてすぐに忘れられます。

今の気持ちで決めるなんてダメです」

主人公、唯為理の言葉にゆっくりと首を振る。

確かにそうかもしれないが、それは今行動しない理由にはならないと思った。

〈主人公〉

「そうかもしれないね。」

今朝、あのまま諦めて……地元に戻って。

そのうち、いずれまた誰かに出会って。わたしはその人を好きになって。

そうすればいつか、唯為理ちゃんの事を忘れられるかもしれない。

そんな風に生きるのもありかもしれない。そんな事も考えた。

……でも、ここで諦めたら、自分が自分でいられなくなると思った。

大好きな人に気持ちを伝えられないまま終わるのは嫌だっと思ったんだ。

……たとえば、あなたに迷惑がられても。誰が見ても、間違った選択になったとしても。

それでも、これから自分がどうなるかよりも、今したい事をしたいと思ったの。
だから、来たよ」

唯為理、主人公の迷いのない言葉に激しく揺さぶられて、今にも泣きそうになる。
ずっと主人公に愛されたかった。

主人公はずっと優しくしてくれた。

だけど、もし、それ以上の事が起きたら。自分だけに愛の言葉をくれるようになったら。
それはどんなに素敵だろうと、ずっと思ってきたのだ。
その夢が、今叶っているのに――……。

「声が震える。泣きそうになりながら」

それでもなんて。おかしいですよ。

「涙をこらえきれなくなる」

あなた、変です。

「泣きながら。悲鳴のようになる」

そんなのダメです……」

〈主人公〉

「……………」

8秒ほど沈黙。

静かなラウンジに、唯為理のすすり泣く声だけが響く。

主人公、それを聞いて、胸が締め付けられる。

やはり自分の選択は間違いだったのだろうか。唯為理の事を幸せにしたかったのに、結局自分は間違いだらけで、彼女をより不幸にするだけなのだろうか。

主人公、一度目を閉じ、大きく息を吸って、それから口を開く。

〈主人公〉

「じゃあ、最後に一つだけお願い聞いてよ」

【泣きながら】

えっ？」

そこで、唯為理が涙で目を濡らしながら顔を上げる。

主人公、そんな唯為理を抱きしめたいと思うが、そうはせずに、続ける。

〈主人公〉

「それを聞いてくれたら帰る。

唯為理ちゃん『やりたい事が見つかったら、何でもお願いを聞いてくれる』って言ったじゃん」

「**なんとか涙をこらえて話す。話がそちらへ向かうとは思わず、たじろぐ**」

……あ、確かにそれは、言いましたけど。

やりたい事が決まった時は。あなたのお願ひ、何でも聞くって言いましたけど……」

〈主人公〉

「だから、聞いて。

あなたの本音を聞かせて下さい。それがわたしのお願いです」

主人公、抱きしめる代わりに、唯為理の手に自分の手を重ねる。

瞬間、唯為理は驚くが、振り払わなかった。

「戸惑う。何を言っているのかわからず、復唱する形になる」
私の、本音。

【少し間をあけてから。声が震える。ようやく意図を理解する】
それを知りたいっておっしゃるんですね」

〈主人公〉

「うん。わたしは唯為理ちゃんの気持ちを知りたい。
次にあなたが言う事。それを全部信じる。全部信じて、受け入れる」

「『それを口にしてしまったら終わりだ』と感じている」
私の気持ち。

【少し間をあけてから】
それは……」

唯為理、目を落として、重ねられた主人公の手を見つめる。

これから自分がどうするべきかはわかっている。

今すぐこの手を振り払って『あなたの事なんか嫌いです』と言うのだ。

そうすれば、主人公はあきらめる。

この人はそういう人だ。

『自分のしたい事をする』なんて言いながら、最後には正しさや、他人の気持ちを優先する人だ。たとえばバレバレの嘘でも、それ以上追及してくる事はないだろう。

そうだ。そうしよう。

それは『自分のやりたい事』だ。

自分は、主人公を危険な目に遭わせたくない。

だから拒絶する。自分はそれがしたい。間違はなくそうだ。

でも、それは——……。

「震える声で。できるだけはつきり『私はあなたの事なんか嫌いです』と冷たく言おうとするが、できない」

私は、あなたの事なんか。

【少し長めに間をあけてから】

あなたの事なんか……」

本心じゃない。それは、私の本音じゃない。

「【長めに間をあけてから。約束を守ってしまふ。本音を言ってしまう】
嫌いなんで、ありえない。」

【気持ちがあふれて、悲鳴のようになる】
大好きです。あなたと離れたくない。あなたと居たい。あなたが好き……！
あなたと。もっと一緒に過ごしたい……！」

〈主人公〉

「……過ごそうよ。わたし、唯為理ちゃんがいるなら何でもできる気がする」

主人公、そう言うと、椅子から立ち上がる。

SE8 主人公が椅子から立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

SE9 主人公が唯為理に近づく足音

【最初から最後まで流す】

「主人公が近づいてきて、驚く」

えっ」

SE10 主人公が唯為理を抱きしめる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「好きです。それから……」

主人公、椅子に座ったままの唯為理を抱きしめる。

「【息づかいだけで、抱きしめられた驚きと、喜びを表現する】

……!」

〈主人公〉

「実は唯為理ちゃんの事、前からめっちゃぎゅっと思ってた。

今していい？

……ていうか、もうしてるけど」

唯為理、抱きしめられて驚きながら、涙が出てくる。

「泣きながらも嬉しそうに」

はい……」

それから、少し笑ってしまう。

そうだ。この人はこういう人だった。

黙って抱きしめて『大好きです』と言うところまではすごく格好いいのに、ちよつと言わなくてもいいような事を言って、面白い感じにしてしまう。いつも、ちよつと格好悪いのだ。

でも、唯為理はそんな主人公が大好きだ。それから……。

「泣きながらも嬉しそうに」

私も。

【少し間をあけてから。一度息を吸って、嬉しそうに】
ずっと前から、あなたにぎゅってしてほしいって思っていました。

【少し間をあけてから】
好きです。

【大きく息を吸ってから。心苦しい。絞り出すように】
沢山ご迷惑おかけするかもしれませんが。

【少し間をあけてから。心苦しい。絞り出すように】
私と出会った事自体、後悔させるかもしれませんが……。

【少し間をあけてから。はつきりと】
でも、一緒にいたいんです。

【また泣いてしまう。でも嬉しそうに】
私とお付き合いして下さい。これが、私の気持ちです」

8秒ほど沈黙。

ここで主人公が、一度身体を離す。

SE11 主人公が一度身体を離す音

【最初から最後まで流す】

唯為理、主人公が何か言おうとしているので、目を合わせようと、見上げる。

〈主人公〉

「ごめん。まだあった、やりたい事」

「【主人公の意図するところがわからない】
ん？」

すると。

「【額に、軽く一回だけキスされて驚く】
んっ」

主人公が突然顔を近づけて、額にキスしたかと思うと――……。。

「【顔が近づいてきて驚くが、受け入れる】

あ。

【唇に、軽く一回だけキスされる】

ちゅっ。

【そのまま二回、唇に軽く触れるだけのキスをされる】

んっ。

ん……っ♡」

〈主人公〉

「わたし。唯為理ちゃんと、ずっとこんな風にキスしたいと思ってた」

【息づかいだけで、キスされた驚きと、喜びを表現する】

……!」

今までで一番近い距離で、主人公が切なげにつぶやく。

それを見て、唯為理は思う。

もう逃げられない。もう自分は、どこへも行きたいと思えないと。

こんなに欲しかったものがここにあるのに、それを置いてどこかへ行けるほど、自分は

強くないと。

まったく、自分は本当に弱い人間だ。

これだけ悩んで、主人公からも、佐智たちからも離れるという『正しい選択』をしたつもりだったのに――……。

もう絶対に離れたくない。この人を手放すなんて、絶対にできない。

「少し間をあけてから。嬉しそうに微笑んで」

はい。私もこんな風に……あなたとキスしたいって思っていました。

【今度は、自分からキスする】

……ちゅっ」

〈主人公〉

「……………」

唯為理がキスすると、主人公がひどく驚いて、肩をびくつと震わせる。それから、ものすごく恥ずかしそうに、潤んだ目を泳がせる。

それは、主人公からキスをしてきた時とは別人のような反応で、唯為理は驚いてしまう。

それとともに、唯為理は今まで感じた事もないような、いや、今まで何度も体験してきたがずっと押し殺してきた、強い感情に駆られる。

そうだ。自分はずっとこの人が欲しかった。欲しくて欲しくてたまらなかったのだ。もっと、もっとこの人と色んな事がしたい。もし、これから、好きなだけ欲しくなってもいいのなら――……。

〈主人公〉

「……全部信じるからね。もう、どこにも行かないでね」

そんな唯為理の気持ちを知ってか知らずか、主人公がまるで子どものような事を言う。しかも、言いながらボロボロ涙を流すものだから、本当に小さな女の子みたいだ。

――そうだ、この人、年上なのに時々年下の女の子みたいでかわいいんだ。守ってくれるのに、自分を守るのは下手で。

人の痛みには敏感なのに、自分の苦しみには鈍感で。

いっぱい傷ついていたのに、それでも自分よりも私を優先しようとしてくれた。だから私、助けてあげたくなるんだ。

この人の力になりたいんだ。

唯為理、主人公の手を取り、自分の頬に当てて、言う。

「泣きそうになりながら。嬉しそうに微笑んで」

はい。もうどこにも行きません。

ずっと……あなたの傍にいらさせて下さい」

一度フェードアウトする。

一夜明けて。一月二十六日（日）六時ごろ。

主人公と唯為理が泊まったホテルの一室。

主人公、ダブルベッドの上でうつぶせの状態で目を覚まし、むくりと起き上がる。
いつの間にか眠っていたらしい。

SE12 主人公がベッドから起き上がる音
【最初から最後まで流す】

……うあ。寝ちやってた……。今何時だ？
スマホ。スマホはどこだ？

SE13 主人公がスマホを探す音
【最初から最後まで流す】

主人公、寝ているあいだに乱れてしまった浴衣を直しながら、スマホを探す。

そんな主人公の隣では、唯為理が小さく丸まって眠っている。

すやすやと控えめな寝息を立て、広いベッドに縮こまってちよこんと寝ている唯為理を見ると、主人公は思わず探す手が止まり、つい背中を撫でてしてしまう。

唯為理の寝姿を見るのは初めてではない。

だが、今はこの人が自分の恋人なのだと思うと、身体に触れても許されるのだと思うと、色々とこみあげてくるものがある。

ああ、かわいい……。唯為理ちゃんってなんか、リスみたいだよねえ。
小動物系女子かわいい……。

主人公、思わずスマホを構えなくなるが、それは盗撮だ。
……というか、そのスマホがないのだった。

そうだそうだ。どこ行った……。スマホ。

ところで、あの後二人がどうなったかというところ、めちやくちやにおしやべりした。
あれから二人がまずチェツクインしようとすると、それは佐智の手によって、当たり前
のように二人部屋に変更されていた。

だから二人は、思わぬ展開に恥ずかしくなりつつも、一緒に部屋に入った。
そして……。仲良くダブルベッドに腰掛けて、ぽつぽつと会話をして。

お互い長旅だったし、まずは少し休もうか……。という結論に至るなり、主人公は力尽
きて眠ったのだった。

いや、ほんとに寝たの。わたし。マジで。じっくり話し合う前に、寝たの。

紆余曲折あつて結ばれて、これからいよいよ恋人らしいことができるようになった瞬間に、寝る。

ちよつと我ながらどうかしているが、正直なところ、昨日はほとんど一睡もできなかった。

そんな状態のまま長時間運転してここまでくるのは、ものすごく神経を使ったのである。

そして目が覚めた時、主人公が最初に見たのは、自分にぴつたりとくつついて眠る唯為理の姿だった。

正直、目を覚ましたら、再び唯為理がいなくなっているのではないか？ という不安はあつた。

でも、それは杞憂だったようだ。

唯為理は主人公に寄り添うようにうまく入り込んでいて、起こさないように上手に離れる方が難しいくらいで。

主人公はそれが嬉しくて、幸せで。胸がいっぱいになって。

唯為理の寝顔を見ているうちにまた眠ってしまつて——……。

二人が揃つて起きる頃には、夜になっていたのだつた。

で、その後はご飯食べに行つた後、一晩中、これからどうするか決めるためにずっとお

しゃべりして……。

そのうちわたしが再び力尽きて、寝た。で、現在に至るというわけですよ。

え？ 昨夜、なんらかの進展があったんじゃないかって？
少しは恋人同士らしいことしたんじゃないかって？

……それは、秘密です。
いや、やっぱり話したいです。

主人公、昨日の事を思い出すと、恥ずかしさで頬が熱くなっていく。
スマホの事は完全に忘れ、両手を頬に当てて、照れる。

キ。キスはしました……。
それからぎゅってし合ったり、一緒にベッドに入って、ちよつと身体触りあっこしたりも、しました……。

あとね。せっかくだからって温泉も一緒に入ったけど、唯為理ちゃんめっちゃわたしの身体見えてきて恥ずかしかった……。

だって『見すぎだよ!』って言っても、じつ……と見て来るんだよ。
あの子えっちすぎない? こっちは気を遣って見ないようにしたのに。
見られたから見返すとか無理だから、結局一方的にめっちゃ見られたよ。

……いや、でも本当は嬉しかった。
いっぱい見てほしかった。

好きな人にいやらしい目で見られるの、最高に嬉しいって、すごく思った……。
わたしでいいなら、いくらでも見てほしいって思った。言えなかったけど。

あと、唯為理ちゃん、わたしがキスされたり触られたりすると『いつもちよつとびくつとするの可愛い』とか言うの。やめてほしい……。

なんか忘れてたけど、あの子って、あんなおとなしそうなりして、すごい積極的だよ
ね。もしかしたら、こういう、ぐいぐい押してくるのが本来の性格なんじゃないのかな。
これじやどっちが年上かわかんないじゃん。そういうの気にしてもしょうがないのかも
しれないけど。

ああ。思い出したらますます恥ずかしくなってきた。

ああ、唯為理ちゃん、好き……。

わたしなんかでよかったら、もう、どうにでもしてほしい……。

などと、主人公が昨日の思い出に浸っていると……。

SE14 主人公のスマホの着信音

【最初から最後まで流す】

突然『スマホはここにありますよ!』と言わんばかりに、電話が鳴った。主人公、漫画のキャラのようにビヨンと跳ねると、枕の下にあったスマホを無事に回収する。

びっくりしたあ……でも無事スマホ発見。

佐智さんだ。

佐智さん、こんな朝からなんだろう？

唯為理ちゃんと会えた事は、もちろんちゃんと報告済みなんですが……。

SE15 主人公がスマホの受話ボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「おはようございませ……。佐智さん、どうしたの？」

しかし佐智、挨拶を飛ばして、いきなり本題に入る。

※収録は通常通り行う※

※ここから佐智のセリフは、すべて電話加工※

〈佐智〉

「【どうにか落ち着こうとしているが、難しい。少しつつけんどんになる】
お姉さん。ニュース見ました？」

ニュース……？ なんのこっちゃ。

〈主人公〉

「ううん？ 見てない」

〈佐智〉

「早口になる。何も知らない主人公がもどかしい」
URL送るんですぐ見て下さい。唯為理にも」

SE16 佐智が一方的に電話を切る音

【最初から最後まで流す】

佐智、主人公が『何のニュース?』と聞く隙すら与えず、即電話を切る。
そしてまた、すぐにメッセージが届く。

SE17 メッセージの受信音

【最初から最後まで流す】

実は主人公と佐智は、これまで連絡先を交換していなかった。

だからいちいち家電にかけたり、直接様子を見に行ったりしていたのだが、昨夜とうとう唯為理経由で電話番号とメッセージアプリのアカウントを交換したのだ。

主人公、言われた通りにメッセージアプリを開き、佐智とのページを開く。

すると、まず送信されたURLの見出しに息をのみ……。クリックした先に出た文章を読んで、言葉も出ない。

SE18 主人公のスマホの着信音

【最初から最後まで流す】

ここで、佐智から再び電話がかかってくる。

主人公、びっくりしてスマホを落としそうになるが、再び出る。

SE19 主人公がスマホの受話ボタンを押す音

【最初から最後まで流す】

〈佐智〉

「見ました？」

主人公、呆然としたまま髪をかき上げ、答える。

〈主人公〉

「見た……」

〈佐智〉

「これ、あいつつすよね？」

〈主人公〉

「うん。間違いないと思う。名前も同じだし……それ以外も……」

〈佐智〉

「【食い気味に、やや早口に】

間違いないっすよね。しかも、唯為理に会う前からやってますよね？
もう見せました？」

〈主人公〉

「それが、唯為理ちゃんまだ寝て……」

【寝ぼけている】

ううん……？」

そこで、唯為理が二人の会話を聞いて起きる。

主人公、唯為理が起きたのに気づいて、スマホをスピーカーモードにする。

〈主人公〉

「あ、唯為理ちゃん。唯為理ちゃん起きて。見て欲しいものがあるの」

主人公、段階を踏んで唯為理に説明しようとするが、その前に佐智が大声で伝える。

〈佐智〉

「【無理やり起こす勢いで】

唯為理起きろ！ あいつ捕まったよ！

ずっと会社の金横領してたんだって！ ニュースめっちゃ出てる！」

「【訳がわからない】

えっ？」

唯為理、混乱している。

無理もない。主人公も、この展開についていけないのだ。だって――……。

〈主人公〉

「衛藤さんが業務上横領で捕まったって、ニュースになってる。

唯為理ちゃんに出会わずと前から、かなりの額、着服してたんだって」

〈佐智〉

「【寝ている唯為理がもどかしい。早く見てほしい】

とにかく早く見ろ！ 送ったから！」

唯為理、説明されてもなお、話についていけない。

唯為理にとって絢とは、生涯ずっと自分に付きまとうかもしれない、恐ろしい存在だったからだ。

【呆然として】

「衛藤さんが、逮捕……？」

佐智、唯為理はまだ寝ぼけていると判断して、主人公と話を続ける。

〈佐智〉

「これなら、妙に金持ってそうだったのも、平日にこっち現れたのも納得ですよね。捕まると思って逃げてたんじゃないですか。

で、

【少しだけ間をあける。『その前に唯為理を無理やりどうにかするつもりだったんじゃないか』と思うが、さすがにこれを言うのはやめる】
探してたと。

【もどかしい。まだ話してたいが、難しい】

あーあたし今朝早いんすよ。もう支度しないと。

【慌てて話をまとめる】

とにかくそういう事なんで！ また連絡します。

【スピーカーモードになったとわかったので、唯為理に話しかける】

やったな唯為理！ これで、思う存分お姉さんとイチヤイチヤできるぞ！」

SE20 電話が切れる音

【最初から最後まで流す】

佐智、それだけ言うと、一方的に電話を切る。
そして、その場には、ぽかんとする主人公と唯為理だけが残され……。

〈主人公〉

「ということです。……これで安心だね」

主人公、唯為理に優しく微笑みかける。

唯為理は、それでも呆然としている。

ようやく話を理解はしたが、心がついていけないのだ。
だって……。

「【訳がわからなくて、主人公に確認してしまう】
私。もう逃げなくていいんですか？」

〈主人公〉

「そうだよ」

「もう迷惑かけずに済むんですか？」

〈主人公〉

「そうです」

「【涙があふれてくる】

あなたといっても、いいんですか？」

〈主人公〉

「そうだよ！ 昨日から『そうだ』って言ってるじゃん。

……おいで」

主人公、両手を広げて、唯為理にこちらへ来るように促す。
もちろん、唯為理は飛び込んできて……。

SE21 唯為理が主人公に抱きつく音

【最初から最後まで流す】

「【泣くのをこらえようとするが、止められない】

あっ……あっ……あ……。

「『うわああん！』と言う感じで、思いつきり泣く』
うっ……ぐすっ……ひっく……うううっ……！」

主人公、唯為理を抱きしめながら、大きく息をつく。

あまりにも意外な結末だったが、それでも今後の事はわからないが……。
とりあえず、目下の心配事は消えたようだった。

一度フェードアウトする。

数日後。一月二十九日（水）。十一時ごろ。
すずらん市汐見台。

場所は青柳家の前の道路。

主人公と唯為理。おじいちゃんから譲り受けた例の車に乗った所。

電車やバスで行ってもいいが、車の方がしっくりくる場所にこれから行くからだ。

そんな二人を、おばあちゃんが見送ってくれている。

主人公は半月ほど、唯為理は二か月近く滞在したすずらん市から、ついに帰る日がやってきたのだ。

SE22 車の環境音

【最初から最後まで流す】

〈おばあちゃん〉

「主人公に向かって」

それじゃあ、向こう着いたら電話しなさいよ。

【唯為理に向かって。さっきよりも声が少し優しい】
唯為理ちゃん。この子の事、よろしくね」

「はい。おばあちゃん、本当にお世話になりました」

〈おばあちゃん〉

「主人公に向かって念を押すように」

あんた。頑張んなさいよ。大変なのはこれからなんだからね」

〈主人公〉

「おう。任せとけ」

〈おばあちゃん〉

「まあ、皆応援してるけどね。

じゃあ。気を付けてね。二人とも。また遊びにおいで」

【じーんとして泣きそうになっている】

はい……ありがとうございます！」

SE23 車が発進する音

【最初から最後まで流す】

こうして車は発進し、再び主人公と唯為理の、二人の時間になる。
それにしても……。

〈主人公〉

「……バレバレだったろうとはいえ、いきなり家族公認になるのは恥ずかしいね。通常じゃちよつとあり得ないくらいのスピードで物事が進んでるというか……」

【恥ずかしくなってくる】

はい。この半月、本当に色々ありすぎましたね。

【少し間をあげてから。ものすごく恥ずかしくなってくる】

というか。さっちゃんが全部しゃべっちゃって、すいません……」

〈主人公〉

「ううん。それは、いずれ話す事だし。

……でも、ホテルから帰ったら両方の家族に全部知られてたっていうのは、なかなかいい体験だったね」

「はい。うちはその、皆心配してたんで。早めに言わなきゃとは思ってたんですけど。

【思い出すとさらに恥ずかしくなる】

あなたのおうちに伝わるまで、ほんと、あっという間でしたね。

【少し間をあげてから。ホツとしたように】

でも、皆受け入れてくれたのは、嬉しいですね。

うちのお母さんなんか『昔からあなたは、女の子が好きな人だと思ってた』とか言うし……」

ほう。初耳ですね。ていうかわたしたち、恋愛の話とか全然した事なかったね。

〈主人公〉

「そうなんですか？」

主人公、唯為理の言葉に内心衝撃を受ける。

まあ、薄々そんな感じはしていたが……。

それは、母親にも察されるほど、わかりやすいのだろうか。

たとえば、好きになる芸能人の女性率が高いとか。

美少女キャラクターの絵を描くのが好きすぎるとか、唯為理にそういう傾向があつて、判断されたのだろうか。

それとも……？ 考えたくない。

ねえ。だから出会うなりあんなに思いっきりアプローチしてきたんですか？
奥平さん、そうなんですか？

実は恋愛経験豊富だったんですか？

主人公、できるだけ顔には出すまいと思いつつ、実際は思いっきりムスツとしながら運転を続ける。

だけど主人公は、自分の事を棚に上げている。

たとえばこれから唯為理に同じ質問をされたら、自分は何と答えるのか。

『考えたくもない』のだ。

二人はカップルになった癖に、お互いの恋愛観も、恋愛遍歴も知らない。

お互いの存在に運命を感じるあまり、『過去の恋愛なんてものは一切ない。あなたが初恋だ』と、見え透いた嘘をつきなくなってしまうている。

それが問題になってくるのは、これから先の話だ。

「そうかもしれないです。

【少し間をあけてから】

でも。ノートぎっしり絵に描く位、好きになったのは。

【少し間をあけてから】

迷惑かけるかもしれないけど、一緒にいたいと思ったのは……。
あなただけです」

〈主人公〉

「……わたしも。

逃げられても追いかけてちゃう位。

嫌われてるかもって思っても、告白したいと思う位、好きになったのは。
この世で唯為理ちゃんだけです」

【意外で嬉しい。ドキドキしながら聞く】

あなたも、私だけ？」

〈主人公〉

「はい。唯一、あなただけです」

主人公、助手席の唯為理をちらりと見て、微笑む。

それは心からの言葉で、とても幸せな瞬間だったが、新しいはじまりの瞬間でもあった。

唯為理が薄々気づき始めていて、だけど主人公は存在すら察知していない問題が、初めて言葉になった瞬間だったのだ。

あれ。『ゆいいつ、あなただけ』って、なんか妙な日本語だね。

でも『唯一』って言葉はいいよね。唯為理ちゃんの『唯』が入ってるし。

「嬉しいです。

【少し間をあけてから】

私、きつとあなたを好きになる為に、ここに来たんですね」

そう。たった一人、唯為理ちゃんだけなんだ。

こんな風に好きになれて、こんな風に好きになってくれた人。

だから、わたし、絶対に唯為理ちゃんの手を離したくない。一生傍にいる人になるんだ。

だからいっぱい努力して、いっぱい愛してもらえる人にならなきゃいけないくて。

つまりそれって『戦い』だよ。

ってことは、あの漫画の彼っぽくやっていくなら、まずは自分っていう『戦力』の分析をする必要があるよね。

でも。わたし——……。

自分のどこがこんなに愛されたのか、全然わかんないや。

〈主人公〉

「……わたしも、唯為理ちゃんと会うためにずずらんに来たって思う。
はいじゃあ、まずは高速入りますか。
途中でご飯食べて行こうよ」

「はい！」

【少し間をあけてから。幸せをかみしめる】
またドライブする夢、叶いましたね。

【長めに間をあけてから】
私、あなたといられて……。

【少し間をあけてから】
本当に、幸せです」

ここでフェードアウトして終了。

※音声ここまで※

そして……。

三十分後。主人公と唯為理、一度車を停めて高速のサービスエリアに降りる。休憩が必要なほど疲れた訳ではないが、せっかくなので立ち寄りたくなったのだ。

そう。サービスエリアが好きただけだ。大好きなだけですよ。

他に理由なんか……あります、けども……。

主人公、サービスエリアを、あからさまにそわそわしながら歩いている。

唯為理はお手洗いだ。

だから、戻って来るまでにサクッと探してサクッと済ませたい。

何をつて……もちろん、あれである。

……うん。いまさら見られたところで、どうという事はないのはわかっている。

唯為理ちゃんなら『その作品好きなんですわ』ってすんなり受け入れてくれて、終わ

りだと思う。

でも、わかっていても、やっぱり『変身ヒロインアニメのガチャを真顔で回している自分』はあんまり見られたくないというか……。

ていうか、今思い出したけど、このアニメって今年で二十五周年だよな。十五年くらい前、つまり十周年の時にも、わたし同じような事したなあ。そうそう。この前唯為理ちゃんを迎えに行ったあのホテルで。その時は学生だったけど、同じように必死でガチャガチャしたわ。

そうだ。あの時は今よりもっと本気で、コンプするまで回す！ とか思ってた。でもダブリ地獄になったから、それがトラウマになって、ていうか弟に『姉ちゃん、もうおやめよ……』ってたしなめられて。

以来ガチャは、こうやって一エンカウントにつき一回までにしたんだよね。家戻ったらあのダブリの山を探そう……。トラウマ過ぎて部屋の奥にしまっているわ。

あつ！ あつたガチャガチャ！

主人公、ガチャの筐体に気持ち速足で近づくと、二段組のうち下段にあった例の変身ヒ

ロインガチャを回すべく、しやがみ込む。

そして百円玉を三枚入れて、回しながら思う。

結局わたしは、子どもの頃も、学生の頃も、アラサーになった今も。

どうにも自分を愛しきれずに『○○ちゃんみたいになりたい』『××くんみたいな人を
目指したい』なんて事ばかり言い続けていて。

だから、これからもずっと何かに憧れ続けて、そんな理想像たちと自分を比べては、
こんで、落ち込んで……。

そういうのを、きつと病氣みたいに繰り返すんだろうけど。

そんなわたしでも『いい』と言ってくれる人がいる。

その人のためにも、やっぱりわたし、努力だけはし続けたいと思うんだ。

そしたら、いつか本当に、その人だけのスーパースーパーヒロインになれるかもしれないから
……。

そう思うくらいは、いいです、よね？

その時、ガコンと音がして、赤と透明の丸いカプセルが出てくる。

主人公、すぐに手を伸ばして、それをつかむが……。

肝心の、中身を見る勇気がない。

あはは。

今、ちよつといい話風にまとめたくなつてたけど、さつそく色々怖いんですが。だって、これ絶対ダブるよね？　だって今まで奇跡的にダブってないもん。

ノーダブりのまま、フルコンプなんてできる訳ないっしょ。

ううう……。見たくない。

どうしよどうしよ。

ところで。

そんな風にうめいている主人公を……お手洗いかに戻った唯為理が、少し離れた位置から、心配そうに見ている。

本当は普通に話しかけようと思ったのだが、ずいぶんと神妙な面持ちでガチャガチャしているの、しばらく様子を見守る事にしたのだ。

だけど唯為理、そんな主人公の背中を見つめながら、なぜか既視感に襲われる。ずっと昔にも、似たような光景を見た気がするのだ。

でも、それがいつだったか、どこだったかは思い出せない。

『その人』も、今の主人公のようにとっても真剣な様子だったので、妙に印象に残っていたのだが……。

なんだろう。何で今、そんな事を思い出すんだろう……。

〈主人公〉

「あっ」

そこで、主人公が声を上げる。

とうとうカプセルの中身を確認したようだ。

唯為理、思わずびくつとするが、見つからないように、そーっと、そーっと少し隠れる。

そして、カプセルをあけた主人公の手の中には……。

ずっと求めていた、変身コンパクトがあった。

——えっ。マジで？

やば。やば。やば！

主人公、興奮のあまりビヨンと立ち上がると、きよろきよろとあたりを見回す。
ついさっきまであんなに隠したがっていたくせに、今はこの喜びを唯為理に伝えたくて
たまらないのだ。

ちよつと虫が良すぎる気もするが……やっぱり、唯為理とはたくさんの事を共有したい
と思う。

そう。知ってほしい。もっと色々な事を。

自分たちは、晴れて恋人同士になれたんだから……。

〈主人公〉

「唯為理ちゃん、唯為理ちゃん！」

主人公、まるで小さな子どものように、唯為理の名前を呼ぶ。
その声に呼ばれて、唯為理が笑いながら駆け寄ってくる。

「はい？」

(
お
わ
り
)